

保湿剤の種類と特徴

小倉康晶

中東遠総合医療センター 皮膚科・皮膚腫瘍科 医長 / アレルギー疾患研究センター

Point

- ▶ 保湿には、皮脂膜、角質細胞間脂質、天然保湿因子が関わっている
- ▶ 外用保湿剤には、皮脂膜としての役割をもつエモリエントと、それに保湿因子の効果を追加したモイスチャライザーがある
- ▶ 剤形によっても使用感が大きく異なる
- ▶ それぞれ保湿剤には適材適所があるため、特徴を知る必要がある

はじめに

老人性乾皮症（ドライスキン）に対して、保湿や保護を目的に保湿剤を塗布することは非常に有用です。現在、保湿剤は医薬品や医薬部外品を含めて多く存在します。保湿剤には、ワセリンやオリーブ油のように皮膚の表面に油膜をつくり、水分の蒸散を抑えるもの、ヘパリン類似物質やヒアルロン酸のように水分と結合して保湿効果を発揮する

もの、尿素やアミノ酸のように天然の保湿因子であるもの、角質細胞間脂質であるセラミドのようにバリア機能を強化し保湿効果を発揮するものなどがあります。それぞれの保湿剤は目的や基剤による使用感が異なるため、患者に継続して使用してもらえるように保湿剤を選択する必要があります。

保湿剤の種類

皮膚は、大きく分けて、表皮、真皮、皮下組織の3層に分かれています（図1）。表皮の最外側には角層があり、この角層は表面の「皮脂膜」、角

層の細胞間を埋める「細胞間脂質」、角質細胞内に水分を保持する「天然保湿因子」で構成されています。皮脂は皮脂腺により産生され、毛孔から排出

され皮膚表面を覆います。角質細胞間脂質の組成は、スフィンゴ脂質が50%であり、スフィンゴ脂質の95%がセラミドです。天然保湿因子は角質細胞内にある蛋白分解産物であり、尿素やアミノ酸で構成されています^{1,2)}。この3つの因子が異常をきたすと脂質と水分をうまく調節できなくなり、皮膚バリア機能が低下します。保湿剤はこの3つの因子の不足を補い、皮膚バリアを復活させることを目的に使用します。

皮膚の構造から考えると、保湿剤は大きく2種類に分けられます。皮脂膜としての役割をもつエモリエントと、それに保湿因子の効果を追加したモイスチャライザーです。エモリエントはワセリンや亜鉛華軟膏のように、油の被膜を作って水分の蒸散を防ぎます。モイスチャライザーの保湿成分はヘパリン類似物質、尿素、セラミドなどです。ヘパリン類似物質には保湿成分に加え、血流量増加作用もあり、凍瘡やレイノー症状を伴う強皮症などの治療薬にも使用されます。尿素製剤は天然保湿因子である尿素を含むため、保湿効果があることは言うまでもありませんが、脆弱な皮膚では刺激を伴う場合があるため、炎症、亀裂を伴うことが多いアトピー性皮膚炎患者や、刺激に対する感受性が高い乳幼児の保湿剤としてはあまり適していません（表1）。セラミドはバリア機能に大

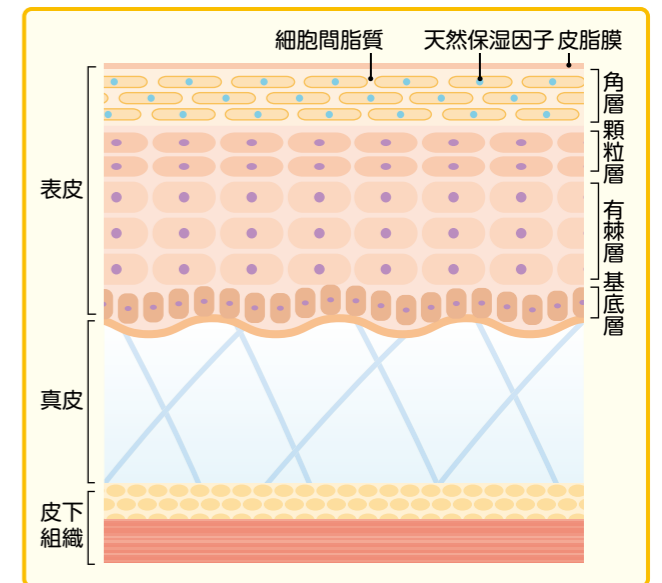


図1 皮膚の断面図

きく関与していることが知られていますが、医薬品としては上市されていません。市販されている保湿剤に含有されているセラミドには植物由来の天然セラミドと合成セラミドがあり、その効果はほぼ同等とされています。より保湿効果を高めるためにはセラミド含有量の高いものがよいとされています。

ことアトピー性皮膚炎に目を向ければ、アトピー性皮膚炎の再燃予防に対する効果としては、モイスチャライザーはエモリエントより優れているという報告が複数あります^{3,4)}。老人性乾皮症においても、比較対照試験はないものの、おおむね

表1 保湿剤の種類

保湿剤の種類	主な医薬品	特徴
油脂性軟膏 (エモリエント)	プロベト、白色ワセリン、亜鉛華軟膏	<ul style="list-style-type: none"> 油分が油脂膜の代わりとなり、水分の蒸発を防ぐ 塗布部分のべたつきがある 水で落ちにくい
ヘパリン類似物質 (モイスチャライザー)	ヒルドイド [®] 、ピーソフテン [®] 、ヘパリン類似物質剤	<ul style="list-style-type: none"> 持続的な保湿効果がある 角層の水分を保持する 血流量を増加させる
尿素製剤 (モイスチャライザー)	ウレパール [®] 、ケラチナミンコーワ [®]	<ul style="list-style-type: none"> 硬い角質を溶かす作用がある 角層の水分を保持する 皮膚バリア機能が低下している場合、刺激感を認めることがある